

第12回女子中高生のための関西科学塾 JST 女子中高生の理系進路選択支援プログラム

女子中高生のための関西科学塾は、科学技術振興機構（JST）の「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」の一環として関西の大学が連携し、女子中高生を対象に講演会や実験などを行う企画です。第12回目となる今回は奈良女子大学を中心に、神戸大学、大阪大学、大阪

府立大学、大阪市立大学、京都大学などが参加し、開催しました。京都大学では、11月19日（日）に18のグループが様々なテーマで実験講座を行い、中学生162名、保護者・引率教員53名が参加しました。



■京都大学での実験一覧

	テ ー マ	部 局	講 師
1	太陽のにじいろを見てみよう	理学研究科	浅井歩
2	「にじいろ」を見よう	理学研究科	馬場正昭
3	高温超伝導を体感してみよう	理学研究科	吉村一良
4	GPS 観測で地球の動きを知る	理学研究科	風間卓仁
5	砂の作る形と模様	理学研究科	成瀬元
6	野菜などの色の分離実験	理学研究科	阿部邦美・常見俊直
7	DNA とはなにか ― DNA に関する基礎実験	理学研究科	朴昭映
8	電波に耳を傾けよう～ゲルマニウムラジオの製作にチャレンジ～	理学研究科	川畑貴裕
9	イケジョ（医系女子）のお仕事：ヒトを科学する！	医学研究科	木下彩栄
10	地下を“掘らず”に探ってみよう！	工学研究科	後藤忠徳
11	私たちは土を食べている	農学研究科	間藤徹・落合久美子
12	南極の氷と石を触ってみよう	人間・環境学研究科	石川尚人
13	生物のミクロの世界を実体験！	人間・環境学研究科	幡野恭子
14	みてわかる生物学 ― クラゲの蛍光タンパク質で生命をみる ―	情報学研究科	前川真吾・細川浩
15	カオス・フラクタルの世界を知る	情報学研究科	宮崎修次
16	蛍光顕微鏡で細胞をみる、染色体をみる	生命科学研究所	Peter Carlton・佐藤綾
17	RNA はストレスを感じる？	高等研究院物質-細胞統合システム拠点	王丹

平成30年度第1期研究・実験補助者雇用制度の利用者募集

平成30年度第1期研究・実験補助者雇用制度の利用者を募集します。育児又は介護のために十分な研究・実験時間が確保できない研究者に対し、研究又は実験業務（注：事務及び教育関係の業務は支援対象外）を補助する者の雇用経費を助成します。本事業は、女性研究者に限らず、育児又は介護に携わる男性研究者も対象となります。

今回の募集について、雇用期間は平成30年4月から平成30年9月末までの間です。応募締め切りは平成

30年1月12日（金）17時必着、選考結果は2月下旬頃に通知する予定です。詳細、申請様式等については、男女共同参画推進センターのホームページをご確認ください。

Web : <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/hojo/Index.html>

問い合わせ先：総務部人事課職員掛

(g-e@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)

栃木県立宇都宮女子高校の生徒が京都大学を訪問しました。

11月10日（金）、栃木県立宇都宮女子高校の生徒41名、引率者2名が京都大学を訪問しました。

医学部の講義室にて、本学の稲葉カヨ理事・副学長（男女共同参画推進センター長）が、自身の大学生から研究者への道のり、専門である免疫学の講義を行い、研究というのは迷いや挫折にも増して成し遂げた時の達成感、満足感は何にも増して大きいものであると述べました。最後に、是非京都大学に来てくださいと締めくくりました。



研究・イノベーション学会第32回年次大会 女性エンジニア活性分科会 企画セッション



10月29日（日）、京都大学吉田キャンパスにて開催された女性エンジニア活性分科会（JWSE）企画セッションに、稲葉カヨ理事・副学長が登壇しました。

「女性研究者支援 ― 京都大学の取り組み ―」をテーマに、本学の男女共同参画推進事業のあゆみや支援制度、本学教員の家事・育児に関する意識、仕事を継続するために必要なことなどについて講演され、参加者は資料を見ながら熱心に耳を傾けていました。

講演後は、コメンテーターが各登壇者の意見をまとめられ、現状の把握とともに将来に向かって「女性活躍にむけて」の意見交換が行われました。

特に女性エンジニアがその能力を活かし、生き生きと力を発揮できるよう、この分科会ではそれぞれの取組について講演され議論が交わされました。参加者からも多くの賛同が寄せられ、盛況のうちに閉会しました。



連載：研究者になる！－第63回－

学校嫌いから研究者に

生態学研究センター・准教授 酒井 章子

小学校最初の3年間をごく小規模な海外の日本人学校で過ごしたせいか、ずっと学校が苦手な子供でした。中学校では、服装や持ち物を制限され検査されるのも嫌でしたが、1日やるのが決まっていて、つまらなくても授業に出なくてはいけない、教科書に書いてあるのに板書をノートに取らなくてはいけない、みんなと同じようにしなければならぬ、というようなことが、いちいち苦痛でした。進学した高校は県内では自由な校風で知られていましたが、嫌いな授業はさぼってばかりで、ぎりぎり卒業しました。母に「今日は学校を休む」というと「じゃあ一緒に美術展に行こう」と誘ってくれ、一緒に出歩いてくれました。

ところが京大に来てみると、好きな授業だけ受けていればいいし、欠席しても誰も何もいわない。人と違っていても、誰も気にしない。おもしろそうな先生がいると研究室を訪ね、調査についていたり、研究手伝いのバイトをしたり、自主ゼミに出たり、中高とは反対に、どっぷり大学に入り浸っていました。

理学部に入ったときはミクロな生物学の方に興味があったのですが、卒業研究では生態学を選びました。ミクロは競争が激しそうだし、マクロの方が同じ研究室でもみんなばらばらの材料を研究していて、自分にはそちらの方があっていそうに思えたからです。バイトでしていたテーマがそのまま卒業研究になり、バイト代がもらえなくなりました。

研究者になると決めて大学に来たわけではありませんでしたが、大学や研究、出会った研究者や大学院生も面白くて、迷わず大学院に進学しました。大学院では、立ち上がったばかりのボルネオ熱帯林の調査地に長期滞在して研究しました。指導教員が来るのは2、3ヶ月に一度、あとはたまにファックスでやりとりするだけで、修士最初の1年はまったく研究できていませんでしたが、無知の強さで焦りもせず毎日森を散歩して、今から考えると贅沢な時間だったなと思います。

学位取得後は、パナマのスミソニアン熱帯研究所に2年間滞在しました。その後、特別研究員、筑波大学を経て生態学研究センターに助教授として戻ってきました。

研究でも私生活でも、大きな転機が30代後半にあり

ました。研究での転機は、総合地球環境学研究所（地球研）に異動し、研究者約70名が参加するプロジェクトの副リーダー、リーダーを務めたことです。ずっと基礎生物学としての生態学を研究していたのに、環境問題をテーマに、しかも文系研究者とも一緒に学際プロジェクトをすることになったのです。私生活は、そのプロジェクト期間中に結婚し子供を二人授かりました。二回目の産休は、リーダーとして受けなければならないプロジェクト最終評価、京都大学への再異動と重なりました。つらい経験もありましたが、周囲の方々がたくさん助けていただきました。

それまでは興味の赴くまま研究をしてきましたが、この転機に、これからの限られた時間で自分は何をしたいのか、じっくり考えるようになりました。生態学では、リモート・センシングから分子生物的手法、データ解析手法まで、どんどん新しい技術が導入されています。でも、自分にはなんにも技術はない。頭が切れるわけでもなく、フィールドワークに長けているわけでもない。悩みは多くまだここに書けるような形にはなっていませんが、少しずつ前には進んでいると思っています。

最後に、このごろ思うこと。ひところより、女性研究者を増やそうという配慮や、育児・出産に関する制度の整備がなされるようになりました。しかし、社会全体でも研究の世界でも、育児は女性がするもの、リーダーシップは男性がとるもの、といった役割分担の刷り込みはまだまだ強く、日々再生産されています。二人の息子が見ているテレビでも、戦隊モノのリーダーはいつも男です（チームの女性比率は若干あがっているようですが）。自分の意見を主張するのは女性らしくない、といった刷り込みが、国際ランキングで低迷する日本のジェンダー・ギャップや、科学者になりたいと思う小学生の男女差の一番大きな要因ではないか、と思います。定説や常識を疑って新しい発見をするのが研究者ならば、研究者は他の人より少しはこの刷り込みから自由なはず。そのような刷り込みを減らしていこう、という発信も、社会における研究者や大学の役割ではないでしょうか。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>